**1889～1939年のフランスの木版表現にみられる浮世絵の影響、そして出版**

フィリップ・ル・ストウム（ブルターニュ地方美術館）

フランス芸術史では、19世紀最後の四半世紀、フランスの版画作家のなかに日本の版画技法を用いた者が少ないながらもいたことは、あまり知られていない。その時期、二つの傾向――オリジナル木版画の流行による木版の復権と、西洋の伝統的な版画の彩色による刷新が同時発生的に起こっていた。こうした版画家たちは、画家たちが主題や画面構成、色彩の配置などを借用したことに加えて、木版の技法や摺り方の実験を通じて、ジャポニスム的なものを表現した。すなわち、複数の版木による多色摺りの手法や、水彩絵の具の使用、ぼかし、バレンによる刷りなどの実験である。

こうした傾向に先鞭をつけたのは、アンリ・リヴィエールとオーギュスト・ルペールである。彼らは1880年代の終わりごろ、はじめて多色摺り木版画を制作した。1890年代に入ると、リヴィエール作として名高いブルターニュ地方の風景画シリーズや、アメデ・ジョワイヨ、トニー＆ジャック・ベルトラン、アドルフ・ボーフレールによる作品群が発表される。ジャポニスムの影響を受けたフランスの木版画の系譜はプロスぺール=アルフォンス・イサックに、そして1920年代、30年代まではジュール・シャデルとジェオ・フリエへと継承されていく。

多色摺り木版の登場は、20世紀最初の四半世紀における、多彩色の挿絵本文化の到来を予告するものであった。ルペールが草分けとなったこの高揚の波は、モーリス・ドニの挿絵を版画化したジャック・ベルトランをはじめ、ジュール・シャデル、ゲオ・フリエ、ダラニェス、ピエール・ウージェーヌ・クレランによって深められ、フランスの愛書文化が誇るいくつもの名品誕生の土壌となったのである。

プロフィール

ブルターニュ地方美術館長、文化財部門上席学芸員。19世紀～20世紀の版画に現れたブルターニュの主題を研究テーマに、ソルボンヌ・パリ第四大学で博士論文を準備中。この分野で、単著『ブルターニュの印象/版画（1850-1950）』（カンペール、パランティーヌ出版、2005）ほか多数の論考を発表している。また、ブルターニュ地方のグラフィック芸術や工芸、とりわけ1880年から1950年にかけてこの地で活動したヨーロッパ系アーティストの仕事に関する著作も多い。

**19世紀における日本の出板文化**

高木　元（千葉大学）

　日本の近世期に於ける製版技術の発展は〈絵入本〉の普及に大きな力を発揮した。18世紀の〈前期戯作〉には比較的質素で渋い体裁を持ち、挿絵なども墨のみで瀟洒に描かれていたのに対して、19世紀以降に見られる〈後期戯作〉は、凝った意匠を備えた美麗な装丁が施されるようになる。この現象は、出板文化が商業資本主義の発展と相俟って〈商品〉として制作出板されたことに拠るものである。注意すべきは、此等の本に備わる口絵や挿絵は作者自身が下絵（画稿）を描いて浮世絵師が清書したもので、恐らく装丁などの造本にも作者が関わっていたと思しき点である。曲亭馬琴は『南総里見八犬伝』に代表される江戸読本の体裁と内容の定型化に大きく寄与したが、口絵や挿絵が単なる小説の〈添え物〉ではなく、作者の趣旨が込められていることを言表している。すなわち近世期の書物は、表紙の意匠や装丁等、造本された書物自体を〈読むべき〉テキスト本文と見做すべきなのである。  
　ところが、19世紀末になると印刷メディアは整版から次第に金属活字に拠る活版印刷へと変化し始め、様々な試行錯誤を経ながらも、料紙も和紙から西洋紙へ、製本法も糸綴から南京綴へと変化し、書物の主流は和装本から洋装本へ向かった。だが、挿絵の位置は大きく後退してしまい、日本の大衆小説において主流であった絵入本の時代は終焉を告げることになるのである。  
  
プロフィール

たかぎ・げん　1955年生。東京都立大学大学院修了。文学博士。現在、千葉大学文学部教授。近世後期小説を中心としつつも明治初期の小説をも含めた日本十九世紀小説を板本と活版というメディアの変遷に則して出板文化社会史として考える。『江戸読本の研究―十九世紀小説様式論―』（ぺりかん社、1993年）、『開化風俗誌集』（新日本古典文学大系《明治編》、共著、岩波書店、2004年）など。

**和装本から洋装本へ―その試行錯誤と展開―**

岩切　信一郎（新渡戸文化短期大学）

　印刷における日本の近代化は、金属活字導入・油性インキ使用時代の到来に始まる。そしてそれが文芸書に及ぶのは明治10年代中頃（1881-1885）のことであった。すなわち、小説の文字が、江戸期の木版整版から近代活字に転換するのであった。そのためには、一枚の紙に活字群と図版が一回で印刷できる「紙型鉛版」の導入が不可欠であった。

　しかもこの本文印刷の転換とともに、本としての体裁も「和装本から洋装本へ」と移る。それは、時代ならでは「速やかな近代化」で、具体的には、明治10年代中頃から明治20年代初頭（1887-1889）にかけての数年のうちの出来事であった。

　前近代の和装本は、すべてが手仕事で、本文・挿絵共に木版整版墨摺、表紙は木版多色摺で製本は糸綴じで、これが明治10年代中頃で終息する。出版界の動きは素早く、この終息の直前で、本文だけは先行して和紙に全文活字印刷に代わったのであった。

　さらに、この期に並行して、目に見えて新スタイルである「洋装本」（擬似洋装本）が登場する。それは表紙に厚紙（ボール紙）を用いることで可能になった。すなわち、「ボール表紙本」の出現である。本の平置き時代が終わり、本は書架に立ちあがった。中の本文は洋紙袋綴じ（洋紙に両面印刷のものもある）に活字印刷、図版挿絵挿入（木版彫図版を紙型取りしたもの）で、しかも厚紙表紙には（当初は活字表記だけの表紙）新進の石版カラ―のクロモ石版が使用され、これが日本式洋装本スタイルのデビューであった。

参考文献

岩切信一郎『明治版画史』吉川弘文館、2009

岩切信一郎「明治期の印刷と出版―近代文芸書装幀の変遷を中心に―」『日本の文字文化を探る　日仏の視点から』勉誠出版、2010

岩切信一郎「印刷都市東京の明治―版の興亡―」『印刷都市東京と近代日本』印刷博物館、2012

プロフィール

1950年生まれ。國學院大學大学院文学研究科修士課程修了。現在、新渡戸文化短期大学教授。専門は日本の版画、及び印刷出版文化。2010年、『明治版画史』で芸術選奨新人賞を受賞する。

**『団団珍聞』と『TOBAE』――小林清親とジョルジュ・ビゴー**

清水　勲（日本仏学史学会）

自由民権運動期の1880年代、二つの諷刺雑誌が運動を支持して鋭い諷刺画で主張を展開した。ひとつは東京の『団団珍聞』、もう一つは横浜の『TOBAE』であった。諷刺画を描いたのは、前者は浮世絵師の小林清親（1847-1915）、後者はフランス人画家のジョルジュ・ビゴー（Georges Bigot, 1860-1927）であった。ビゴーは『団団珍聞』にも寄稿した。それは丁度、同誌で清親が活躍していた時代である。両者は互いに交流し、諷刺画の技術を高めあっていたと思われる。

　日本には石版諷刺画の歴史がほとんどない。日本の近代諷刺画は『団団珍聞』などの亜凸版による印刷物から始まったといってよい。一方、19世紀はフランス諷刺画の黄金時代で、その傑作の多くは石版画と木口木版画によって生み出された。その時代に生まれ育ったビゴーは、その技術を持って来日し、小林清親に伝えたのである。

参考文献(発表者の著作・監修者を中心に)

『小林清親諷刺漫画』岩崎美術社、1982

『近代漫画２　自由民権期の漫画』筑摩書房、1986（前田愛と共著）

『ビゴー日本素描集』岩波文庫、1986

『ビゴーが見た明治ニッポン』講談社学術文庫、2006

『ビゴーの150年』臨川書店、2011

「『トバエ』の登場人物」『仏蘭西学研究』39号、日本仏学史学会、2013

プロフィール

1939年東京出身。近くの親戚が出版社を経営し、漫画雑誌・漫画本を出版していたことから漫画に興味を持ちだす。20代まで漫画家を目指す。30代より漫画史に興味を持ちだし、資料の収集を始める。40代より漫画関係の本を出版しだす(現在までに80冊余)。現在、京都国際漫画ミュージアム研究顧問。『諷刺画研究』主宰(現在、58号)。漫画・諷刺画研究家。G.ビゴー研究家。日本仏学史学会会長。元平成帝京大学教授。

**ちりめん本と長谷川武次郎：明治半ばの欧文挿絵本出版状況**

大塚　奈奈絵（国立国会図書館）

「ちりめん本」は、木版多色刷りで挿絵を印刷した上に、さらに欧文活字を印刷した和紙を圧縮して縮緬状に加工した絵入り和装本である。縮緬の布に似た風合いから「ちりめん本」と呼ばれる。和紙のちりめん加工は江戸時代から行われ、一枚摺りの版画や千代紙、婦人の髪飾り等に製品化されていたが、「ちりめん本」は、明治の中頃、洋書等の輸入を経て、出版を始めた長谷川武次郎(1853-1938)が工夫した新機軸だった。

1885年から長谷川の弘文社が出版を始めたちりめん本の「日本昔噺シリーズ」(*Les contes du vieux Japon*)には、当初から英語・ドイツ語・フランス語版があり、最終的には9カ国語で刊行された。英語版の訳者ではバジル・ホール・チェンバレン、ジェームス・ヘボン、ラフカディオ・ハーン、フランス語版では外交官であったジョゼフ・ドートゥルメールやジュール・アダン等が知られる。一方、挿絵は小林永濯、鈴木華邨、新井芳宗らの絵師によっていた。

長谷川は、これらを国内で販売するとともに、1885年から横浜に支社を持つ上海の出版社Kelly & Washを通じて輸出・販売し、日本の出版社が海外出版社と提携した最初の例となった。長谷川は、その後も、各国の出版社契約を結んで出版を行うとともに、1900年パリ万国博覧会等にも出品・入賞した。長谷川のちりめん本は、ジャポニスムを背景に1880年代から1920年代まで欧米を中心に愛好されて影響を広げた。来日したフランス人ピエール・バルブトー(Pierre Barboutau)が河鍋暁翠らに挿絵を描かせたちりめん本や平紙本の『ラ・フォンテーヌ寓話選』〔1894〕(Choix de fables)等は、フランスの美術愛好家向けに出版されたものであった。

参考文献

石澤小夜子『ちりめん本のすべて』三弥井書店, 2004.

高山晶『ピエール・バルブトー　知られざるオリエンタリスト』慶応義塾大学出版会, 2008.

Frederic A. Sharf. *Takejiro Hasegawa : Meiji Japan’s preeminent publisher of wood-block-illustrated crepe-paper books.* Peabody Essex Museum, 1994.

プロフィール

国立国会図書館収集書誌部主任司書、東洋大学文学部非常勤講師。2013年3月日本大学大学院総合社会情報研究科博士前期課程修了。専門は比較文化。長谷川武次郎に関する論文には以下がある。

大塚奈奈絵「テラコヤ(寺子屋)--「日本」を発信した長谷川武次郎の出版」『国立国会図書館月報』604･605号. 2011.7･8 p.4-17

(<http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_3050795_po_geppo1108.pdf?contentNo=1>)

大塚奈奈絵「木版挿絵本のインパクト ―1900年パリ万博に出品された「寺子屋」―」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』14. 2013. p.13-19

(<http://atlantic2.gssc.nihon-u.ac.jp/kiyou/pdf14/14-013-019-Otsuka.pdf>)

**藤田嗣治をめぐる、日仏出版文化の融合**

林　洋子（京都造形芸術大学）

1913年8月、画家・藤田嗣治(1886-1968)はパリの土を初めて踏み、そこから1929年秋まで母国の土を踏むことがなかった。｢乳白色の下地｣と呼ばれる独自の絵画スタイルでつかみとった20年代のパリのサロンや美術市場での成功の一方で、彼はこの間、30冊を超える本の装丁に関わっている。もちろん欧文書籍だが、なかでも20年代に数を増す日本関連のテキストの装飾が彼に集中したのである。そのきっかけは1923年の『日本昔噺』であり、先行翻訳のあった日本の昔話を収集・再編集したものである。このほか、ポール・クローデルが駐日フランス大使であった時期の三冊（『東方所観』〔1925〕、『朝日の中の黒鳥』〔1927〕等）、ピエール・ロティやトーマ・ローカらフランス人作家によるジャポニスム小説、ほかに観光案内や翻訳ものが知られる。それらは基本的にヨーロッパの挿絵本の形式にのっとり、藤田がテキストにあわせて日本風俗を添えたもので、木版画、銅版画、ポショワールなどによる部数限定本である。

藤田が離日後10年以上経過したなかで日本表象を異国で続けえたのは、この｢ジャポニスムの街｣に19世紀半ば以降蓄積されていた、江戸期の版本や明治期の欧文挿絵本あってのことである。彼はパリで作家、編集者、印刷・版画職人、愛書家のネットワークにも恵まれ、日仏の出版文化を融合した成果をつぎつぎに実現した。その後、1930年代、昭和初期の東京に定住した時期には、フランスでの経験を生かした翻訳ものや詩集の装幀を手がけることになる。

参考文献

林洋子『藤田嗣治　作品をひらく』（名古屋大学出版会、2008）

〃『藤田嗣治　本のしごと』（集英社新書、2011）

展覧会カタログ『藤田嗣治と愛書都市パリ展』北海道立近代美術館、2012

プロフィール

京都市生まれ。京都造形芸術大学准教授。東京大学文学部、同大学院、パリ第一大学博士課程修了。東京都現代美術館学芸員を経て現職。専門は美術史、美術評論。藤田関係の著書に、『藤田嗣治　作品をひらく』（名古屋大学出版会、2008）、『藤田嗣治　手しごとの家』（集英社新書、2009）、『藤田嗣治　本のしごと』（同、2011）ほかがある。『藤田嗣治　作品をひらく』で第30回サントリー学芸賞、第26回渋沢・クローデル賞ルイ・ヴィトンジャパン賞ほかを受賞。

**ジャン＝ガブリエル・ダラニェス――画家にして出版人**

間瀬　幸江（宮城学院女子大学）

　1941年、ジャン・ジロドゥは挿絵本『イメージとのたたかい』を発表する。挿絵に用いられたのは、大戦前夜のフランスを離れた藤田嗣治の描いた一枚の絵《眠る女》。作家と挿絵画家、テクストとイメージ、狂乱の時代と占領時代。異なるものをつなぎ合わせる蝶番の役割を果たすレイアウトに、この本をプロデュースしたであろうジャン＝ガブリエル・ダラニェスの、出版美学の粋が凝縮されている。

　ダラニェスは、木版画家として挿絵本の世界に足を踏み入れた。テクストを、ひとつの解釈にはめ込むのではなくむしろ際立たせる彼の作品は、読みの深さと高い技術の証左である。技術力、企画力、実行力を兼ね備えた彼はのちに、モンマルトルのアトリエに活動拠点に、ちょうど演出家が舞台作品を作るのと同様に、出版人として挿絵本という「作品」を次々に世に問うていく。

本発表では、版画家からアート・ディレクターまで、挿絵本出版に関わるさまざまな職能を自在に自ら引き受ける一方で、文壇と画壇、出版界、ひいては愛書家協会にいたるまで、人と人とを繋ぐ要となったダラニェスの柔軟さを、代表作（ルナール『にんじん』、アラン＝フルニエ『グラン・モーヌ』、ジロドゥ『シュザンヌと太平洋』ほか）におけるテクストとイメージの相関関係の分析を通して提示する。とりわけ、ジャン・ジロドゥとダラニェスの協働に言及する。既存の技法や、レイアウト、テクストの読みなどを、固定観念から解放しゼロから問いなおすことにより新しい作品を世に送り出し続けた彼は、出版人という名の表現者であり、出会い創出のキーパーソンであった。

参考文献

間瀬幸江『小説から演劇へ　ジャン・ジロドゥ　話法の変遷』Formes narratives dans la dramaturgie de Jean Giraudoux（早稲田大学出版部、2010年）

間瀬幸江「フジタとジロドゥ－知られざる≪邂逅≫をめぐって」『比較文学年誌』（早稲田大学比較文学研究室、2011年）

*Jean-Gabriel Daragnès 1886-1950 un artiste du livre à Montmartre*, Musées de Sens / Éditions du Linteau, 2007.

プロフィール

宮城学院女子大学准教授。早稲田大学第二文学部、同文学研究科、リヨン第二大学博士課程修了。早稲田大学坪内逍遥記念演劇博物館助手、同文学部演劇映像コース助教を経て現職。専門は両大戦間期フランス演劇史、フランス語教授法。主要著書には『小説から演劇へ　ジャン・ジロドゥ　話法の変遷』（早稲田大学出版部、2010年）が、主要論文には「寺山修司におけるジャン・ジロドゥからの影響―ラジオドラマ『大礼服』論」（日本演劇学会『演劇学論集』紀要54、2012年）などがある。